
俺達と私達の最幸な世界

ていん？がー！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達と私達の最幸な世界

【Nコード】

N1632X

【作者名】

ていん？がー！

【あらすじ】

どうも、元ていんがです。

色々な不都合により、前IDからのログインができなくなったのでこうして新しいIDを作ることになりました。

それとこの話は未知による不条理に基づく存無し（ワールドレス）のお話の内容に少し手直しを加えた上で前作のPROLOGUEから更新していきます。

ですので前作の未知による不条理に基づく存無し（ワールドレス）のお話を読んでいただいてる皆さんもこちらのほうをお読みください。

こんなことになってしまいましたが応援のほうをよろしく願います。

第零話『君の正体について』

【ここは、どこだ？】

俺は生暖かい液体に包まれてる中、意識を開いた。
目を開けようとしても開けることができず、体もうまく動かせなかった。

俺は何がどうなっているか理解できずにいると

「レガ…アナタ…コビ…ラバ…ハ、ソノ…ヲミタ…シヨ
ウ…」

【グウウウツツ！？】

割れるような痛みが頭を襲うと同時に断片的に誰かの声が頭の中に響いてきた。

《おやおや、もう『それ』がきてるのか。気の毒だね。》

【…誰…だ？…】

痛みに悶えていると、頭の中にさっきの声とは違う声が聞こえてきた。

《これは失礼した。私は世界を司り、管理をする者。》

【…神…様？…】

《ああ、そうか。君はまだ産まれていないからまだ知識はないんだったね。仕方ない、君に教えなければならぬことがあるが、それは君がもう少し大きくなってから言おう。ああ、そうだ。最後にひとつ、これを忘れないかどうかはわからないが、君の正体について教えよう。》

【…俺の…正体？…】

《そつだ。君は普通でも特別でも異常でも過負荷でもなく、まして
ノットイコール
や悪平等でもない。

君は

ワールドレス
無存現だ。》

【俺は…無存現？】
ワールドレス

《そつだ。君は…ああ、もうこんな時間か。悪いが、君はもうすぐ
産まれる。せいぜい頑張れたまえ。》

【ちょっと待てっ！無存現ワールドレスとは何なんだ！？】

《もう時間がないから詳しくは言えないが、無存現ワールドレスは存在するはずのないものだ。》

そう声が言い終わるかどうかの瞬間
俺は後ろの壁に押し出され、そのまま狭くも暖かい道を通ると
さっきよりも広い空間に出たと同時にたくさんさんの声が聞こえてきた。

第一話『君をほっておけなかったから』（前書き）

更新遅れてすいません（T―T）

次は検定試験があるので更新は12月の中旬ぐらいになります…

ちよっ！？マジだよ、マジ！！

第一話『君をほっておけなかったから』

「はあ〜。」

まだ昼下がりあまり人気のない公園のベンチにて銀髪のウルフカ
ットの少年
おこがえり はがり
御幸返芳賀裏2才はため息をついていた。

普通、人気のない公園で幼い子供がため息をついていたら、
友達がいらないから寂しい、親が構ってくれないから寂しいなど、何
かしらの悩みを抱えているのだろと思うが、彼には友達がい
どころかたくさんいて、両親も彼にたくさん愛情を注いでもらい、
何不自由ない生活を送っている。

では彼はどんな悩みを抱えているのか。

それは

『思い通り』になるからだ。

昔から彼の周りには不思議なことが起こった。

彼が今日の晩御飯はハンバーグが食べたいと思えばその日の晩御飯にハンバーグが出たり、友達が欲しいと思うと自然と友達ができたり、もっと親に構って欲しいと思うとその日から彼の親はより一層彼に愛情を注いだ。

彼は最初は嬉しく思ったが、だんだんと自分の『思い通り』になることにつまらなさを感じていった。

自分が何かを願うとその通りになる。

『思い通り』に願わずにいようと思ったことは何度があった。

しかし、芳賀裏はそれを実行出来なかった。

それを防ぐにはみんなと同じじゃなくちゃならない
みんなと違ってはならない
みんなより突き出てはならない

だから、芳賀裏は一人ぼっちにならないためにみんなと同じ普通^{イーマル}を
演じて演じて演じ続けた。

それ続けていく内に芳賀裏は本当の自分の気持ちを出すことを忘れ、心に思うことすら忘れてしまい、
いつしか上っ面の気持ち（うそ）と無感情だけが残った。

しかし、そこから変わりたいという気持ち（ほんとう）が上^う辺^そまじりにも浮き出たこともある。

しかしその反面、諦めて思い通り（このまま）でもいいとも上^う辺^そまじりに芽生えてきていた。

そう……

これからの人生は思った通りのものだけにしかないだろう。

まだ幼い彼はそう結論づけ

思った通りに友達と遊んで、

思った通りに親に愛情を注いでもらい、

思った通りに思い通りの何の奇跡も変哲もない日々を繰り返していた。

「……………帰るか。」

そう呟くと芳賀裏はベンチから立ち上がって、帰ろうと歩き始める。

が、その瞬間。

「気持ち悪いんだよっ！……！」

ガッ！！

芳賀裏が公園から立ち去ろうとした時、公園の奥側から罵声と共に硬いものが何かにあたった音が聞こえた。

この音に芳賀裏は歩を止めたのだが

芳賀裏は正義心や心配に思っ止まった訳ではない。

ただ

期待したからだ

芳賀裏は今の生活（思い通り）そのものが変わることはどうせない、とすでに諦めていたが、この苦しみ（思い通り）をほんの一瞬でも和らげれたら、とこの先の出来事に淡く期待を寄せた。

芳賀裏が罵声が聞こえてきた場所に駆けつけると
そこには芳賀裏より年上らしい少年達数人が芳賀裏と同年代である
う少女を囲んで少女に石を投げつけていた。

少女はうずくまっていたので顔はわからなかったが、毒々しい赤い
リボンのついたふわふわとした短いピンクの髪はリボンごと砂と埃
にまみれ、身に付けている可愛らしいワンピースも同様に汚れてお
り、さらに透きとおるように白い肌は至るところにあざがあり、血
も流れているところを見ると石を投げつけられていただけでなく悲
惨な暴行を受けていたのだろう。

すると少年達の内の一人が芳賀裏に気付いた。

「何だよ、お前？」

そう言われると芳賀裏は無表情のまま

「俺は御幸返^{おこがえり}芳賀裏^{はがり}だ。

お前ら、その子に何してる？」

とだけ返した。

「あ？こいつが『化物』だからに決まってるだろ？」

ピキッ

「……………化物……………」

「そうだ、こいつが同じ場所にいるだけで吐き気がする！それにこいつが手で触ったら何でも腐っちまうから気持ち悪すぎるんだよ！！」

そのために俺達は『化物』退治をしてるのさ！！
こんな風になっつ！！！！」

そう言うと同時に先程までしゃべっていた少年は少女に向かって手に持っていた石をおもいきり投げつける。

石は少女の頭に当たり、少女の頭からはドロリと赤い血が出て、少女は小さく「ううっ…。」とうめいた。

ピキッピシッ

パキンッ

「おい」

その瞬間、芳賀裏の周りの空気が変わった。

「！？な、なんだよ？」

少年達は突然、芳賀裏のまとう雰囲気が変わったことにたじろいだ。

先程までは自分達より明らかに年下のただの少年だったはずだ。

だが、今の芳賀裏はさつきとはまるで違う。

殺伐なんてもんじゃない、とてもおぞましく得体の知れないにかだった。

「気持ち悪いからなんだよ、触ったら腐るから何だ。確かにその子はただの人間じゃないかもしれない。だがなあ、その子もお前らも同じ人間だろうがっ！！」

「う…うるせえっ！だからなんだってんだよお…。」

芳賀裏の気迫に押されるが、少年達は虚勢を張りつつも突き返した。

「お前らは少し違うからといってその子を『化物』呼ばわりしただけじゃなく、酷いことまでした。
だから

【そのこにあやまれ
そしてにとすがたをみせるな】

ゾクゾクゾクツツツ！！！！

「「「ツツツ！……」」」ごめんなさいッ！……！」「」」

少年達は少女に謝罪をしたと同時にものすごい勢いで公園から逃げ出していった。

「ふう…とりあえず、大丈夫か？」

芳賀裏は無感情な声に戻りながらも倒れている少女に優しく手を差し伸べた。

「え！？……あ…ああ、うん…」

少女はさっきの出来事とのギャップに驚きつつもゆっくり顔を上げた。

さっきまでは俯いていて見えなかったが、少女の顔はまるで人形のように可愛い、
しかし少女の目はどろどろに腐っているかのように虚ろであった。

そして少女が芳賀裏が差し伸べた手をとった。

その瞬間

グジュルルッ

芳賀裏が差し伸べた手は腐り出していった。

「ひっ…いやあああああっ!!」

少女は自分に触れている芳賀裏の手が腐り出したことに気付いてすぐに芳賀裏の手を振りほどこうとしたが、芳賀裏は手を離すどころ

か、少女の手を強く握り返した。

数秒がたった時、芳賀裏は少女の手から離し

「大丈夫だよ、君の手はもうなにかを腐らせることはない。」

と言い放った。

「えっ？」

少女は芳賀裏の発言に驚きつつも、試しにさっき少女の頭に当たった石を持ってみると

石は腐ることはなく何も起こらなかった。

「えっ、でも、あなたの手は………！？」

自分が石に触っても腐らなかったことに驚愕しつつも少女は腐って
るはずの芳賀裏の手を見た瞬間、

言葉を失った

腐ってるはずの芳賀裏の手が
いつの間にか元に戻っていたのだ。

「……どうして……どうして、腐らせることしかできない腐ったあた
しのために……ここまでしてくれるの……？」

「……………」

「こんなみんなに迷惑をかけるあたしなんて死んだほうがいいのに
……
ねえ、何でよっ……！……何でっ……」

「ほっておけなかったから」

「……………え……………？」

「君をほっておけなかったから。
自分が望んだ能力^{ちから}じゃないのに、その能力^{ちから}振り回されて不幸になる
姿を見たくはなかったから。
…実際俺もこんな呪われた能力^{ちから}で『化物』扱いされたからな。
まあもつとも、『思い通り』にその扱いを無くしたんだがな…」

そう言った芳賀裏の目はさっきまでの無感情さはすでに無く強くそして優しいものであった。

その言葉を聞いて少女は目を潤わせ一気に泣き出した。

「……………う…うわああああんっ!!」

「なっ!どうした!?!とにかく落ち着け!」

突然泣き出した少女に芳賀裏は慌てながらも泣き止ませようとする。

「うつ…グスン…こんな…こんなあたしでも幸せになってもいいの…?」

それを聞いて芳賀裏は微笑みながら強く返した。

「ああ、もちろんだ!」

「グスン…ヒック…あ…ありがとう…」

「そっぴやまだ名前を聞いてなかったな。何て名前なんだ?」

少女は流れる涙を拭い

「怒江…あたしの名前は江迎怒江。あなたのお名前は?」

「俺か?俺の名前は御幸返芳賀裏。よろしくな、怒江!」

そう言われた芳賀裏の顔には以前の上辺^{うっそ}も無感情もない、
本当の本音の笑顔があつた。

荒廃した腐花^{ラフラフレシア}が消去されました。

《いやはや、まさか彼がこんなにも早く物語を変えろとは驚いたなあ。流石『二年前』から目をつけたことだけはある。》

一面が白そのものの空間に佇んでいる『男とも女ともとれるその者』
はティーカップに入つた紅茶を一杯飲むと、嬉しそうに言う。

《まさか能力を使って過^{マイナス}負荷を消すとはね。さつさと『代わり』を
用意しなくちゃね。》

『男とも女ともとれるその者』は目の前に浮かんでいるモニターの中から一人の少女を映すと手前にあるボタンを押した。

《これで良しと。早速手間を掛けさせられたけどその分、面白いものが見れたからいいか。

この先めんどくさいことが起きるかもしれないけど彼に働いてもらうのはもう少しあとになるかな。まあ、それまではこの神様を楽しませてくれよ

ワールドレス
無存現くん。》

そう言つて『男とも女ともとれるその者』もとい、神はティーポットでティーカップに紅茶を注ぎ、香りを楽しみつつゆっくり飲んでいった。

第一話『君をほっておけなかったから』（後書き）

???「ふっふっふっ、
ついに…ついにきたのだな」

???「この私、この小説の作者こと
ていん？がー！のコーナーが始まったのだー！…うわぁっはっはっ
はっはっはっ！…！！」

シーーーーーン

ていん？がー！「……………」

ていん？がー！「…よく考えたら一人でいたんだっただ…。」

ていん？がー！「まあ、そんなことは置いといて…！」

ていん？がー！「この小説の前書きと後書きはていん？がー！ワールドなコーナーとして次話からスタートだ！！」

ていん？がー！「みんなー、この小説ともども応援よろしくな！！
！（みんな応援してくれるかな……？）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1632x/>

俺達と私達の最幸な世界

2011年11月26日15時48分発行